

2009年2月16日

本質論の誕生へ

生物系と個人

JOMON あかでみい 山田 学C

序

現実論の生命観と生活観を論理的に統一します。より健康平和な保育・教育・保健・看護・医療（とくに保健）のためにです。

節の題名を綴り全体内容を示します。

〔進化と発達〕がありその中心に〔遺伝配列と言語規範〕があります。〔生命と健康平和生活〕について考え〔物理的過程・生理的過程・認識過程〕を規定します。〔冥想〕するとともに〔生命体と生命反応〕を考えます。〔認識・自覚・保育〕を確認し〔認識の保健能力とIT〕という指摘をします。〔記憶と認識の整理〕について考え〔生体防御〕についてまとめます。〔道〕を提案し〔結び〕として本論の次を示します。

進化と発達

地球表面において生物系の進化があります。

生物系の進化の部分として人間社会の発達（伝統と創造）があります。

人間社会の発達（伝統と創造）の部分として各個人の一生（休養と労働のくりかえし）があります。

生物系の進化は、すなわち、生物系の環境化と環境の生物系化です。環境と生物系の相互浸透です。

環境と生物系の相互浸透たる生物系の進化には、正面進化と側面進化があります。

地球表面における生物系の正面進化と側面進化として、種の分化（棲みわけ）と相互関連（主に食物連鎖）があります。ある種の隆盛とある種の衰退もありました。

生物系の正面進化の部分として人間社会の発達（伝統と創造）があります。

人間社会の発達（伝統と創造）は、すなわち、人間社会の自然環境化と自然環境の人間社会化です。自然環境と人間社会の相互浸透です。

自然環境と人間社会の相互浸透たる人間社会の発達（伝統と創造）には、正面発達と側面発達があります。

地球表面における人間社会の正面発達と側面発達として、民族の分化（棲み

わけ) と相互関連 (主に労働連鎖) があります。ある民族の隆盛とある民族の衰退もありました。

人間社会の正面発達の部分として先進個人の組織 (道徳と経営と政治解消の組織) があります。

遺伝配列と言語規範

生物種はその生存環境に適応してきました。適応の対象たる生存環境にあわせて生体の構造と機能を進化させてきました。

このような適応と進化において、生体内の ATP・ADP はほぼ不変です。細胞内の DNA は変化してきました。生体の構造と機能の中心として酵素やホルモンの適応と進化がありました。

生物系の環境は環境の生物系化としても進化してきました。

生物系において遺伝配列の複製と正面進化・側面進化がありました。

人間社会という特殊な生物系においては記録と通信の発達もあります。言語規範の伝統と分化があります。これからは言語規範の再統一と創造も望まれます。IT 記号規範や数式規範の統一と創造も望まれます。

生命と健康平和生活

生命体 (主体) にはウィルスと原核細胞と真核細胞と細胞団と器官と個体と種と生物系があります。生体は生命体の部分です。

生命とは生命体 (主体) における代謝過程です。

個人の発生・成長において細胞・器官の構造・機能の分化と全身的な相互関連があります。

個人の発生・成長は個人の生活環境に適応・対応する形態において生物系の生理史や人間社会の認識史をそれなりにくりかえしています。

膜や皮膚は過去の生理史・認識史 (主体と環境) を現在において保存・再現するための保護です。

主体 (遺伝配列) は生存環境に適応する形態において生命 (代謝過程) に反映します。

生存環境に適応する形態において主体 (遺伝配列) が変化することもあります。

個人が生きたら世界にどう対応するかという創造です。

社会環境・自然環境へ対応する理念・理論・技能・技術・規律・体力がそれなりに必要です。人間の主体は遺伝配列と世界観 (世界のどの部分に注目しているか) です。

生活の創造です。

民族生理とは諸民族における個人の誕生と死亡という代謝です。

各個人の健康平和生活の原則は、姿勢動作・呼吸・食事・人間関係・精神・生活環境を修正していくことです。社会環境・自然環境への対応としての移動・精神・人間関係・食事・呼吸・姿勢動作を創造していくことです。

各個人の認識と労働の過去・現在・未来を考慮し、認識をしだいに現実論化していき労働をしだいに健康平和化していきます。各個人の認識と労働の修正です。

これからの人間社会は、認識と生命における矛盾する論理に着目し、体内と認識したいにおける闘争と調和に着目する必要があります。

一方、各個人の一生は休養と労働のくりかえしですが、経理とは経営組織における仕入と販売という労働代謝です。

生物系の普遍生存史があります。

人間社会の特殊生活史があります。

たとえば日本民族の特殊生活史があります。

たとえば日本民族の各個人の個生活史があります。

物理的過程・生理的過程・認識過程

世界は時間と空間の統一です。そして過去から現在、現在から未来へ、歴史があります。歴史はすなわち主体度を変化させて物理的進化であり生理的進化であり認識発達（伝統と創造）です。

ある範囲の物理的過程を、直接に、細胞ないし細胞団の諸代謝という主体的な論理において把握し直したものが生理的過程です。

神経系の生理的過程を、直接に、感覚・表象・概念の発達というさらに主体的な論理において把握し直したものが認識過程です。

物理的過程の累積が物理的進化であり、生理的過程の累積が生理的進化であり、認識過程の累積が認識発達です。

地球表面は一体でありその物理的運動・生理的運動・認識運動には論理的な模様があります。これを 地球面模様 と呼ぶことにします。地域・海域は 地球面模様 の部分なのです。

雲が行き水が流れる。地球表面の H₂O 分子団の立体模様の波が進化してきた、進化していく。それとともに、諸タンパク質のアミノ酸など立体模様の分布が進化してきた、進化していく。それがすなわち生物系でありましょう。

地球表面には物理史があります。

主体度を変化させて生理史があります。生理史に対応する物理部分史がある、

ということです。

さらに主体度を変化させて認識史があります。認識史に対応する生理部分史がある、ということです。

冥想

体内から太陽系までの冥想です。

人間は体内に異常を感覚したとき体内に注意しつつ特定の姿勢動作において特定の呼吸を工夫すると体内の異常部位の細胞呼吸が改善され個人呼吸が改善されます。

人間は丹田に力がこもるようにし記憶と注意と発想に良い血液の栄養状態を追求すべきです。

中医学の経絡は直立二足歩行の常態における体液分布を想定したもののようなものです。

経穴は指圧や針や灸に対する体内感覚を認定の基礎としているようです。経穴は体液分布における問題点であるかもしれません。体液分布の問題点を感覚して調整するための支援が指圧や針や灸でしょうか。

生物系の進化と個人の発生において人間の認識を支える臓腑と手足の体液分布を理解していく。その際、儒教や道教の部分的架空性はさておき中医学には現実論の全体観が含まれているのではないのでしょうか。全身の血行や全身の各部位の細胞団・器官の相互適応（とくに臓腑と皮膚・筋肉）について理解していきたいものです。なお、人間の直立二足歩行は自覚的な姿勢動作と呼吸の調整がないと常態になりません。

経絡の連関は次の順に冥想します。臓は中実的な器官、腑は中空的な器官です。屈筋は手足を屈するとき用いる全身の筋肉、伸筋は手足を伸ぶときに用いる全身の筋肉です。

空気を代謝する肺臓と水・食物を代謝する最終の大腸腑と手の腹側背側屈筋。

水・食物を代謝する最初の胃腑と血液の質を調整する脾臓と足の外側内側伸筋。

血液の循環を調整する心臓と水・食物を代謝する中心の小腸腑と手の腹側背側伸筋。

水毒を貯留する膀胱腑と水毒を選別する腎臓と足の外側内側屈筋。

心臓を保護する心包臓と臓腑を保護する三焦腑と手の中軸屈伸筋。

脂肪を乳化する胆腑と栄養の循環を調整する肝臓と手の中軸伸筋。

体液の循環と手の屈伸筋が連関し（ ）、体液の質と足の伸屈筋が連関し

() ているようです。体液と皮膚・筋肉の立体模様の流転です。

直立二足歩行と自覚認識と音声言語・文字言語という人間の生理的進化・認識発達において臓腑と手足の体液分布を病態ないし半病態から常態へ自覚的に修正したいものです。

次に精神です。人間は体内が快となるよう注意しつつ諸民族の空想伝統に無理なく同化し健康平和な空想を自覚的にしたりそれを現実論に再編していくことが善いです。

そして太陽系の物理的進化に、とくに地球・月系の物理的進化に、人間社会という特殊な生物系がどう対応していきましょうか？ 地球表面の火山・地震・台風への健康平和な対応とはどういうものか？ 地球表面の日光・月光・空気・水・土の健康平和な調整とはどういうものか？ ところで、海水の化学的組成は海域によらずほぼ一定です。地球（と月）には海水の組成をほぼ一定に保つ機能があるのでしょうか？

生命体と生命反応

生命体を構成している物質は交替しているとともに生命体の構造・機能は一定期間、保持されています。

ある物質における生命反応はすなわち、まわりの光や物質の存在模様との相互規定です。着目する物質とまわりの光や物質との存在模様（熱的活動を含む）に規定されて生命反応が実現しています。まわりに何がどうあるかにより生命反応のあり方が変化します。また、その空間の物体場（いわゆる「重力場」）にも規定されます。

生物系の進化はすなわち、実に精妙な構造と機能もすなわち、地球表面において数十億年間、継続し進化してきた、これからも継続し進化していくであろう、生命反応の総合です。

細胞の原形質は 1 ~ 100 ナノ・メートル粒子のコロイド溶液（ゾルまたはゲル）です。このコロイド溶液における粘性や弾性や塑性や分離性が生命反応に関与しています。

諸酵素が生命反応を触媒しています。物理学には 場 という概念がありますが生物系において諸酵素の機能を活性化する 酵素活性場 という概念も大切でありましょう。また、酵素活性場 と嗅覚・味覚・体内感覚の連関も興味深いです。

認識・自覚・保育

認識過程は、直接に、神経系の生理的過程です。その神経系の生理的過程に

において特定イオンと電位の波があります。神経細胞における無活性状態は、細胞内に K^+ が多く細胞内の電位がマイナス、細胞外に Na^+ が多く細胞外の電位がプラスです。神経細胞における活性状態は、細胞内に Na^+ が増え細胞内の電位がプラス、細胞外に K^+ が増え細胞外の電位がマイナスです。活性状態は細胞内外における K^+ と Na^+ の交替であり電位のマイナスとプラスの交替です。この活性状態すなわち特定イオンと電位の交替が、神経系において次々ととなりの部分に伝播し、活性形式すなわち交替形式が移行していく。特定イオンと電位の交替形式の移行、すなわち特定イオンと電位の波が、神経系の生理的過程においてあります。

人間には神経系外生体の自然運動と自覚外認識の自然運動と無自覚認識や自覚認識の念的運動があります。自覚外認識は、直接に、神経系のうち脳の視床下部や網様体と神経線維の連絡がない部分の生理的過程です。無自覚認識や自覚認識は、直接に、神経系のうち脳の視床下部や網様体と神経線維の連絡がある部分の生理的過程です。その際、視床下部や網様体が無活性状態なら、直接に、無自覚認識であり、視床下部や網様体が活性状態なら、直接に、自覚認識です。

個人の神経系全体における特殊な部位の生理的過程は、直接に、個人の認識全体における特殊な面です。

人間の認識は感覚器官を通して感覚し、そして表象し概念し目的し意志し、筋肉や分泌腺を調整しています。また、認識じたいを反省し、主体的な意志を客観的に調整（すなわち規範）しています。感覚には体内感覚と体外感覚があります。体外感覚には視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚があります。

人間は胎内において神経細胞団を準備し生後は神経細胞が細胞分裂することなく神経線維と神経回路網という神経細胞団の構造と機能を発達させます。

胎内における神経細胞団の準備と生後 1 年における神経線維と神経回路網の発達がその個人の情感や情念の基礎となるようです。健康平和な現実論の保育の大切さです。

認識の保健能力とIT

自身の認識を反省し自身の感覚器官と神経回路網を予想し認識と感覚器官・神経回路網の対応を解明していく。これはこれからの学問において大切なことです。

諸民族の認識伝統に学び諸種生物の生理的進化に学び上の解明を実現していきます。

なお、IT の論理から人間の認識を解明しようとするのは誤りです。まず人

間の健康平和な保育・教育・保健・看護・医療の理念を確立してから次に IT の利用と開発を考えるべきです。

また、まず IT があり次に医療があり次に看護があり最後に保健があるより、まず保健による自他の姿勢動作・呼吸・食事・人間関係・精神・生活環境の修正があり（沖 正弘氏のヨガの継承）、次に看護による養生生活の支援があり、次に医療による診断と治療があり、最後に IT の利用と開発があることが理想ではないでしょうか。

さらに保健以前に健康平和な保育・教育が大切です。自他の生活を修正していく保健という労働は保育・教育による自他の認識への健康平和学の養成が前提であるからです。すなわち自他の認識の保健能力の養成です。毎日の生活において相手にはほぼ自覚的な表現と自覚的無自覚的な表情と生理的な顔色・呼吸・姿勢動作があります。それを観察し相手の血液的労働と神経的認識を丁寧に理解していく能力が大切です。

記憶と認識の整理

昼夜の瞬間瞬間の認識の積み重ねがあります。

環境への対応・適応として感覚を記憶したり、諸感覚を表象化したり、諸表象を概念化したりしています。

その個人の情感や情念につながっている認識は記憶されやすく自覚認識は記憶されやすいようです。また、同様の感覚の断続的な積み重ねがあると記憶されやすいようです。

概念により諸表象や諸感覚を整理しています。ある概念からある表象へ、ある表象からある感覚へ、着目していくことがあります。

今は世界のどの部分に注意しているか、どの部分をどう確認しているかという、意識の傾向もあります。

過去に感覚したことをなかなか思い出せないが、新たに同様の感覚があると過去の感覚を思い出す、ということもあります。また、過去に感覚したこととは別の感覚を、その時の感覚と思いがいいしていることもあります。

意図や予想や空想や仮定という認識の記憶もあります。

総じて、その時その時において痛快な認識（感覚・表象・概念）が記憶されやすいようです。

人間にはさまざまな習慣がありますが、それに対して現実論の学問や技能や規律を自覚的に育てていくことが善いです。

どういう認識をしどういう労働をしどういう栄養（および排泄）があったかにより、どういう夢がありどういう忘却（想起不能または記憶消失）があるか

が、左右されるようです。

あるいは腎臓による排毒機能や副腎によるホルモン分泌が、媒介的に、脳脊髄液を健康に保ち、諸記憶を着実にするのもかもしれません。栄養のための腸管（消化・吸収器官全体）と教養のための脳に共通にある、ペプチドホルモンの存在も、興味深いです。

いずれにせよ、生理的過程としては、環境への適応として感覚器官と神経回路網の履歴（発達や衰退）がある、ということでありましょう。

生体防御

人間の生体防御系（免疫系はそのもっとも進化した一部分）は異物・病的細菌・ウィルス・毒素などの侵入を排除し、体内の老廃細胞・老廃物やガン細胞などを処理しています。

生体防御系に関与しているのは毛・皮膚・粘膜・涙・鼻汁・唾液・皮脂・汗・胃酸・腸内健康細菌・体液内活性物質・好中球・マクロファージ・リンパ球などです。

また、ホルモンや神経系が関与する本能的な背伸び・あくび・うなり・くしゃみ・下痢・食欲不振などもあります。

人間は全身の皮膚・感覚器官を通して体外感覚（視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚）をしています。全身の体液・皮膚を通して一定の排泄（排毒）をしています。とくに足の裏・手のひら・舌・鼻の穴・耳全体・眼・頭皮が重要です。

また、血液を中心とする体液についてそのホルモン濃度などを体内感覚しています。

以上を踏えつつ自覚的な生体防御は 自分自身が個性的に必要な栄養と教養と精神安定 を追求し続けることでしょうか。その究極は 記憶と念を快適にする ことでしょうか。

社会的には 生体防御としての学問・規範・芸術と武道 という概念も成立するでしょうか。人間の思考・情念・情感・生体においてとくに情念の良縁を追求し悪縁を回避することは、それが直接に、健康な酵素活性という生理に関与しているのかもしれませんが。

道

地球表面において生物系（のちに人間社会を含む）が進化してきた、進化していくのは、必然でありましょう。ただし、その進化の細かい因果構造については謙虚に未解明であるとしておきましょう。

世界全人民の世界観を健康平和理念へどう編集し世界全人民の遺伝配列をど

う棲みわけるか？

これが健康平和社会への道でありましょう。

世界の物理的進化・生理的進化・認識発達を悦ぶ。これこそが学問の喜びであり人間の喜びではないでしょうか。

人間社会にはたとえば旧約聖書と新約聖書を正しく理解しその現実論と架空論をどのように継承し発達させあるいは止揚（内容は保存し形式は否定）していくかという課題もあります。

人間には各人の自身の体内が不快であっても資産増殖や国家の維持強化や架空論の保持を追求する認識の運動がありました。しかし、そろそろ各人の自身の体内の快を自覚的に追求する認識を発達させていきたいものです。

とにもかくにも、現実論として自他の健康平和生活を追求する生活に専念したいものです。親鸞のやさしさに守られつつ ...。善人なおもて往生をとぐ。いわんや悪人をや。

結び

本論を踏え、現実論の道德（人間生活において根本的な規範）をあえて商業として普及していく経営の理論、すなわち道德商業経営論をしだいに具体化していきたいものです。JOMON あかでみいはあくまでもヨガと中医学と西洋看護・医療を論理的に統一する統合保健という理想をめざします。『論語』からお借りします。徳は孤ならず。必ず隣あり。

〔文献〕本論を構築するため以下の文献に学びました。ありがとうございました。これからもこれらの文献に学ぶべきことが多くあります。諸分野の研究の区別と連関を解明していく矛盾論理学（いわゆる「弁証法」）こそが大切です。

本田克也・加藤幸信・浅野昌充・神庭純子『看護のための「いのちの歴史」の物語』（現代社白鳳選書 2007）

南郷継正『なんごう つぐまさが見る看護学科・心理学科学生への“夢”講義(1)(2)』（現代社白鳳選書 2006～7）

海保静子『育児の認識学こどものアタマとココロのはたらきをみつめて』（現代社 1999）

瀬江千史『育児の生理学医学から説く科学的育児論』（現代社白鳳選書 2007 改訂版）

薄井坦子・瀬江千史『看護の生理学(1)(2)(3)人間をみる看護の視点』（現代社白鳳選書 1993～2004）

薄井坦子『看護のための人間論ナースが見る人体』（講談社 1987）

三浦つとむ『認識と言語の理論 第一部』（勁草書房 1967）

今西錦司・柴谷篤弘・米本昌平『進化論も進化する今西進化論と分子生物学』（リポート 1984）

今西錦司 + 吉本隆明 『ダーウィンを超えて今西進化論講義』(朝日出版社 1978)
吉本隆明 『詩人・評論家・作家のための言語論』(メタローグ 1999)
松本克己 『世界言語のなかの日本語日本語系統論の新たな地平』(三省堂 2007)
時実利彦 『脳の話』(岩波新書 1962)
大木幸介 『脳をあやつる分子言語知能・感情・意欲の根源物質』(講談社ブルーバックス 1979)
池上正治 『「気」で観る人体経絡とツボのネットワーク』(講談社現代新書 1992)
天津中医学院 + 学校法人後藤学園編集責任 『針灸学 [基礎編]』(東洋学術出版社 1996 第 2 版)
沖 正弘 『ヨガ総合健康法沖ヨガの考え方と修行法(上)』(地産出版 1976)
沖 正弘 『なぜヨガで病気が治るのかヨガ総合健康法(中)』(地産出版 1977)
西村祐二郎編著 『基礎地球科学』(朝倉書店 2002)
伊勢村壽三 『化学の話シリーズ 6 水の話』(培風館 1984)
山田真弓・西田 誠・丸山工作 『大学の生物学進化系統学』(裳華房 1981)
穴戸和夫・塚越規弘 『微生物科学基礎・バイオ・環境利用まで』(昭晃堂 1999)
以下、本論の準備となった山田 学の著です。
『学問の転換未来の世界を日本から』(民衆図書刊行会 1994)
JOMON あかでみいサイト www.jomaca.join-us.jp 「店頭」画面参照
健康生活への道 「認識と労働」「対象と言語」「原子転換論」「環境問題」「脱レーニン」「物理学再考」
同サイト「理念集」画面参照

「狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。」

(『聖書新改訳』日本聖書刊行会 1970 より)